

土台を据える

信仰と行ない

今日の宣言は、今からお話しするテーマと直接関連しています。エペソ 2:8-10 です。

「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。行いによるものではありません。だれも誇ることをないためです。私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをもあらかじめ備えてくださったのです。」

前回の学びで始めたテーマの続きです。ヘブル 6 章 1 節と 2 節に挙げられている、クリスチャン信仰の 6 つの重要な土台の教理を見ていきます。要点だけを復習しましょう。死んだ行いからの悔い改め、神への信仰、バプテスマの教理、手を置くこと、死からの復活、永遠のさばきです。前回の学びで、「悔い改めから信仰へ」というテーマを取り扱いました。悔い改め、そして信仰に移っていきました。今日はその信仰について、新約聖書でとてもよく用いられているにもかかわらず、あまりにも多くの神の民がその関係性について明確な理解をしていない、2 つのシンプルな言葉、「信仰と行ない」をテーマにします。

簡単に言えば、信仰によってとは、私たちが信じているもの、行いとは、私たちが行なうことという意味です。私たちが信じているものと、行なうことの正しい関係性はどのようなものでしょうか。

福音を簡潔に定義することから始めたいと思います。私たちの多くが、あたかもその意味を確かにはっきりと知っているかのように、「福音」という言葉を用い、それについて語ります。しかし、実は、「福音」について語る人の多くが、福音とは何かということを知らないのではないのでしょうか。パウロは I コリント 15:1-4 で非常に明確に言っています。まず、1-2 節です。

「兄弟たち。私は今、あなたがたに福音を知らせましょう。これは、私があなたがたに宣べ伝えたもので、あなたがたが受け入れ、また、それによって立っている福音です。また、もしあなたがたがよく考えもしないで信じたのでないなら、私の宣べ伝えたこの福音のこぼしをしっかりと保っていれば、この福音によって救われるのです。」

そして、パウロは福音を続けて述べています。福音は、複雑なものではなく、3 つのシンプルな歴史的事実です 3-4 節です。

「私があなたがたに最もたいせつなことから伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書の示すとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、また、葬られたこと、また、聖書の示すとおりに、三日目によみがえられたこと……」

そう、福音は、キリストが私たちの罪のために死なれたこと、葬られ、3 日目によみがえられたという、3 つのシンプ

ルな歴史的事実から成っています。そして、それらの3つが含まれていないなら、福音は語られていないのですが、実際には福音をまったく含まない、世間で言うところの福音のメッセージ、というものが多くあるのです。

キリストが私たちの罪のために死なれたこと、葬られ、3日目によみがえられたこと、それらは、私たちが握っておかなければならない3つの不可欠な事実です。

そして、最初の証拠となる権威は、イエスが復活された後にイエスを見た目撃者ではなく、聖書です。パウロは、「聖書の示すとおり」と2度言っています。そしてパウロは、イエスの復活の目撃者であった様々な人々をリストアップしています。しかし、信仰に関わるすべての最終的な権威は、聖書にあるということ覚えておいていただきたいのです。

さて、パウロは信仰によって私たちがこれらのシンプルな事実を受け入れるなら、行ないなしに、私たちが何かをすることなしに、義が与えられると説明しています。私たちは義とされるのです。パウロが、私たちが何をするかによってではなく、何を信じるかによってであるのだと言っていることを理解することがとても重要です。行ないによるのではなく、信仰によるのです、パウロは、ローマ4章でマアブラハムは信仰によって義とされたと言って、アブラハムから私たちは学ぶことができると語っています。そしてこのことから学ぶことについて語り始めています。4章4節です。

「働く者の場合に、その報酬は恵みでなくて、当然支払うべきものとみなされます。」

もしあなたが、誰かのために働いて報酬を受けるなら、それは恵みではなく、あなたへ支払われるべきものです。しかし、パウロは、それは私たちが義を得る方法ではないと言っています。働きによるのではなく、私たちが得た何かでもありません。

そして、パウロは最も驚くべきことばを続けています。もし、あなたが聖書を読んで驚いたことがないなら、あなたは今までにちゃんと聖書を読んだことがないと思います。なぜなら、聖書は最も驚くべき言葉を含んでいるからです。5節です。

「何の働きもない者が、不敬虔な者を義と認めてくださる方を信じるなら、その信仰が義とみなされるのです。」

ですから、もしあなたの信仰が義とされたいのであれば、あなたは最初に何をしなければなりませんか。行ないをやめることです。「働きは効果がありません。」あなたが、行ないによってそれを得られると考えている限り、あなたは義を受け取ることができません。これは宗教的な人にとって最も難しいことです。私たちは、神の好意を得るために何かをしなければならない、というアイデアにあまりにも慣らされています。好意は努力して得られるものではありません。恵みも努力して得られるものではありません。定義によっても好意や恵みは得られません。ですから、神によって義とされたいのなら、最初にあなたがしなければならないことは、試みることをやめることです。働きをやめることです。それが、多くの人を驚かせる言葉ですが、聖書は驚きの本です。私たちの多くが気づいている以上に驚きの本です。

信仰と行ないの本当の関係性は何でしょうか。行ないが重要でないというのではなく、それには順序があります。

先ほど私はエペソ2章から引用しました。エペソ 2:8-10 節です。

「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。」

私たちは信仰を持っているという事実を自慢することはできません。なぜなら、信仰とは、神が与えてくださるので、私たちは信仰を持てるのです。それは、私たち自身で作り出せるものではありません。

そして、こう言っています。

「行いによるものではありません。だれも誇ることはないためです。」

行ないによって義とされると信じている人々について語っている多くの場所で、パウロは、違う、誇ることがないようにと言っています。ご存知のように、行ないの宗教は人間の高慢を助長します。そして高慢はとても大きな基本的罪です。ですから、神は、私たちが高慢にならないように、義とされる方法を定められたのです。

宗教を複雑にしている人々、あえて名前をリストアップしませんが、基本的に、より難しい宗教は人々がおごり高ぶっています。彼らは、実際に厳しく困難な、断食やいけにえなどを行なっています。これは高慢を助長します。神は、高慢を退けますが、謙遜な者に恵みを与えます。ですから、神は私たちの高慢が助長されないような神の義に至る方法を考えられました。

クリスチャンについて話しましょう。非常に律法的で規則に厳しいクリスチャンは、愛のない人々であることが多い、ということに気づいていましたか。あなたが彼らに愛を求めて行っても、あまり得られないでしょう。事実、律法主義と愛は、ほぼ真逆です。

ですから、私たちは続けて高慢を助長するあらゆるものに対して、警戒しなければなりません。そして、宗教は基本的に高慢を助長します。神の恵みがない宗教は、高慢を助長するのです。

しかし、行ないのための場所があります。行ないが重要でないということではなく、正しい順序であればよいのです。エペソ 2:10 は、それが明確に書かれていると私は思います。

「私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをもあらかじめ備えてくださったのです。」

ですから、神が私たちがキリストにあって新しく造ってくださり、キリストにある者はだれでも、新しく造られた者であると聖書は言っています。神は、新しい被造物のためにふさわしい行ないを備えてくださっています。しかし、古い肉的な性質は神が備えてくださっている良い行ないのうちを歩むことができません。良い行ないに歩む前に、信仰によって新しく造られなければならないのです。そうして、良い行ないは究極的に重要になって来るのです。しかし、あなたは正しい順序を知っていなければなりません。まず、信仰による新しい創造、そのあと、神が私たちのために備えてく

ださった良い働きです。

気づいていらっしやるかどうかわかりませんが、あなたがキリストにあって新しく造られた者であるなら、神はすでに働かれていますので、あなたが神のために成すべきことが何かを理解する必要はありません。あなたがしなければならないことは、神が前もってあなたのために備えてくださっていることを見出すことです。自分の人生のために、自分で計画を立てようとするのではなく、神のご計画が何であるかを見出してください。神の計画は、私たちが期待することとは違っていることが多いでしょう。

私自身の経験から簡単な例を挙げましょう。私がまだ幼い頃、兄弟がいませんでした。私は9歳から25歳まで、全寮制の学校で育ちました。数人の女の子の友達を除いては、女の子との出会いはあまりありませんでした。基本的に、女の子は不思議な存在で、どのように接すればいいのかわかりませんでした。しかし、神が私を召した時、私が結婚した女性は、子どもたちの施設を持っており、結婚したその日に私は8人の女の子の養父となったのです。みなさんも、デレク・プリンスらしいとは思わないでしょう。私が自分で自分の人生を計画していたなら、そのような状況の中には決して入らなかったでしょう。しかし、それは神が私に入るようにと用意してくださった良い働きでした。私は多くの失敗もしましたが、実際には、神が備えてくださった良い働きに歩むということを知るという充足感がありました。

では、少し定義を見ていきましょう。私たちがはっきりした考えを必要とするところは、ここです。事実、あなたは常に明確な考えを必要としています。それに賛同していただけますか。では、恵みの性質について簡単に話し合いましょう。恵みとは美しい言葉ですが、乱用されることが多いです。私がある教会でのメッセージで、「実は、恵みについてほとんど知らないのに、自分たちを恵みの教会と呼んでいるのです。」と語りました。そして私は、その教会の名前が「恵み教会」という名の教会の一つである事実を知りました。それは事実です。恵みという言葉を使う多くの人々がその本当の意味をまったく知らないのです。恵みの根本的な意味は、顔立ちの良さ、すなわち美しさです。そして、それは、私たちが神を信じているゆえに神が私たちに与えてくださる美しさです。神は私たちをご自身の恵みで美しくくださるのです。

そして、パウロがローマ 11:6 で言っている、これは核心をついています。

「もし恵みによるのであれば、もはや行いによるものではありません。もしそうでなかったら、恵みが恵みでなくなります。」

私のことばで言いかえれば、あなたは恵みを行ないによって得ることはできません。あなたが何かをして得ることができるものは恵みではありません。これは、いくら私たちが謙遜にさせます。私たちは、神の恵みにより頼まなければならないのであって、何かによって得ることはできません。神の恵みを努力して手に入れることのできることは、何もありません。しかし、恵みによって私たちは信仰を通して救われました。あなたにただ、信仰があるという事実に興奮する時、パウロが別の箇所でこう言っていることを覚えておいてください。

「それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。」

信仰によって救われたなら、あなたは何も誇ることはできません。神は最大の罪である高慢からあなたを守ること

によって、それをなしてくださいました。

私たちが何を信じ、何をするかという、信仰と行ないの関係性について考えたいと思います。私の知る限り、私が話すことは、新約聖書から直接引用しているにも関わらず、みなさんは驚き、ショックさえ受ける人も多いでしょう。恵みによるシンプルな新約聖書の救いのメッセージを単に語るだけのことが、クリスチャンだと公言しているほとんどの人には驚きであることを、私は発見しました。

私はある集会で、「もちろん、キリスト教は規則のかたまりではありません。」と言いました。そして会衆を見ると、人々はショックを受けていました。私が「神は死んだ。」と言うよりも、彼らにはショックだったのではないかと思うほどでした。彼らのキリスト教の概念は、規則のかたまりです。あなたも同じかもしれません。私は、キリスト教は規則のかたまりではないことをあなたにお教えしたいのです。あなたは規則によってキリスト教を完成することはできません。

ローマ 3:20 でパウロが言っていることを見てみましょう。偶然にも、ローマ書のテーマは義です。私たちはいかにして神の前に義となることができるか、というのがローマ書では中心的に扱われています。何世紀も前に、ヨブは苦しみの中で叫んでいます。ヨブ記 9:2 節です。

「しかし、どうして人は自分の正しさを神に訴えることができようか。」

ヨブの宗教的な友人たちはみな、すべての人は神の前に義であり得るという考えを嘲笑いました。しかし、神はその叫びを聞き、多くの年月を経て、ローマ人への手紙を通して、その「どうして人は自分の正しさを神に訴えることができようか。」という質問に答えています。そしてそれは規則を守ることによってではありません。

ローマ 3:20 でパウロは言っています。

「なぜなら、律法を行うことによっては、だれひとり神の前に義と認められないからです。律法によっては、かえって罪の意識が生じるのです。」

この聖句には「律法」という言葉が2回出てきますが、それは原文のギリシャ語にはありません。私は10歳からギリシャ語を学んでいるので、自信を持って言います。パウロはそのように言いませんでした。パウロが言ったのは、

「なぜなら、規則を行うことによっては、だれひとり救われないからです。規則によっては、かえって罪の意識が生じるのです。」

あなたは、「では、律法の目的はいったい何ですか。」と聞くでしょう。律法の目的は、あなたの持っている問題が罪であることを示すための神の診断です。律法はあなたの問題の原因を究明しますが、それを解決することはできません。それはただ恵みによってのみ解決されます。ですから、あなたが恵みを必要としているところを、律法に示してもらわなければならないのです。それが律法の目的です。

ヤコブは、その書簡の中でこう言っています。ヤコブ 2:10-11 です。

「律法全体を守っても、一つの点でつまずくなら、その人はすべてを犯した者となったのです。なぜなら、『姦淫してはならない』と言われた方は、『殺してはならない』とも言われたからです。そこで、姦淫しなくても人殺しをすれば、あなたは律法の違反者となったのです。」

ヤコブが言っていることがお分かりですか。あなたは、律法全体を守るか、律法を守らないかのどちらかです。律法の99%を守ることは、律法を守っていることにはならないのです。律法とは全体のシステムです。

ところで、私たちは誰一人、律法を99%守っている人はいません。ユダヤ教正統派は613の命令を守らなければなりませんと言います。実を言うと、彼らは32ほどしか守っていないと認めているのです。今地上にいる人でモーセの律法全体を守っている人はいません。今までにも、一人を除いては守ったことがありません。そう。イエスだけです。イエスは、地上におられた時に、律法的な人々に言いました。「あなたがたの内の誰が私を罪に定めるのですか。」彼らは答えることができませんでした。イエスだけが律法を完全に守った唯一のお方です。あなたにも、私にもできないのです。

私はイギリス軍にいて救われ、救われているということについて人々に語り始めたときに気づいたことは、彼らはみな、救いについてではなく、宗教について考え始めたということです。一般的に、人々は、自分たちが守っているわずかな規則を引き出してこようとするのです。それが、その人の義なのです。それは特別に自分の状況に見合うようにされています。特注品です。もし、なにか間違ったことをしたなら、自分の規則のリストには含めません。私は、これが人間の考え方だと気づきました。私は規則のリストを守ることにより義である、いいえ、そうではありません。あなたが全規則を守れば、そうかもしれませんが、あなたは守ることができないし、また誰も守ることができません。あなたは、守っているか、そうでないかのどちらかです。もしあなたがすべてを守ることができたなら、神はあなたを義と見なしてください。しかし、あなたにはすべてを守ることができません。ですから、あなたには、努力して得ることのできないもの、恵みという選択肢だけしか残されていません。

すでに指摘しましたが、もう一度ローマ3:20を振り返りましょう。

「なぜなら、律法を行うことによっては、だれひとり神の前に義と認められないからです。」

ですから、規則を守ることによって神に義とされようとするのは、もうしないでください。なぜなら、あなたは失敗するからです。あなたの規則が正しいものであるなら、それを守ることにはできません。あなたの規則が間違っただけなら、その間違っただけの規則を守ることによって義とされることはありません。お分かりですか。

先へ進みましょう。次にお話したいことは、人々がショックを受けることです。律法と恵みは矛盾するという事です。両方から益を得ることはできません。どちらか一方です。ローマ6:14にこうあります。

「罪はあなたがたを支配することがないからです。なぜなら、あなたがたは律法の下にはなく、恵みの下にあるからです。」

ですから、それらは二者択一なのです。あなたは律法の下、あるいは恵みの下にあることができますが、同時に両

方の下にあることはできません。そして、もしあなたが律法の下にあるなら、あなたは恵みの下にはなく、またあなたが恵みの下にあるなら、あなたは律法の下にはいません。

パウロが暗示していることは、あまりにもかけ離れています。彼は、あなたが律法の下にはなく、恵みの下にあるので、罪があなたを支配することはない、と言っています。あなたが律法の下にいるなら、罪があなたを支配すると言いたいのです。罪の支配から逃れる唯一の方法は、律法を守ろうとすることをやめ、神の恵みにあずかることです。あなたは、ショックを受けるでしょう。すでに少しショックを受けていらっしゃるかもしれません。

ローマ 8:14 でパウロは言っています。

「神の御霊に導かれる人は、だれでも神の子どもです。」

本当の神の子どもとはだれですか。常に聖霊に導かれている人です。それは規則を守ることの二者択一です。あなたは、規則を守るか、聖霊に導かれるかのどちらかで、両方はできません。

それをわかりやすくするための具体例があります。聖書学校を卒業したばかりの一人の若者がいました。彼は神学の学位を取得し、丈夫で健康で、方向音痴でもありませんでした。神は彼に言いました。「さあ、どちらかを選びなさい。地図を使うか、個人的な案内人を用いることができるかです。」その若者は言いました。「私は頭がいいし、神学の学位も取りました。地図も読めますから、地図にします。案内人はいません。」そして彼は出発し、太陽が輝き、鳥たちが歌っています。しかし、3日後、闇になります、真夜中の森の中にいました。彼は崖の淵に立ち、東西南北もまったくわかりませんでした。やさしい声が彼に言います。「お手伝いしましょうか。」誰だと思いませんか。個人的な案内人、聖霊さまです。そして彼は言いました。「聖霊さま、あなたが必要なんです！」聖霊はその場所から彼を連れ出し、再び道を歩き出しました。

少し経つと、彼は独り言を言います。「私はばかげていた。あれぐらいのこと、助けなんかなくてもなんとかできたはずだ。パニックになることはなかったんだ。」彼が見回してみると、案内人はもうそこにはいませんでした。一人きりでした。「自分でできるさ。」

それから3日後、彼は沼地の真ん中にいました。一歩進むごとに足が深みにはまり、這い出ることができません。やさしい声が彼に語りかけます。「あなたは今私が必要ではないですか」「ああ、聖霊さま、どうか助けてください。あなただけが、私をここから助け出すことができます。」そして彼は聖霊さまと一緒に目的地へ向かって歩き続けました。そして彼は、案内人である聖霊さまに言いました。「今私はとても素晴らしい地図を手に入れました。一緒にこの地図を使いましょう。」すると案内人は言いました。「ありがとう、でも地図はいません。私は道を知っています。ついでですが、私とその地図を作ったんです。」

言っている意味が分かりますか。私たちは、自分でできないことに気づくまでに、どれほど時間がかかることでしょう。それは私たちの良い行いではなく、規則を守ることではなく、聖霊さま、恵みの霊によります。常に聖霊に導かれる人は、神の子どもです。

そして、ガラテヤ5章でパウロはこのテーマに戻っています。このテーマは新約聖書の大きなテーマの一つです。このテーマを本当に理解したことがない人は、薄暗い状態にいます。多くのクリスチャンが、律法と恵みの中間のような薄暗い中に住んでおり、彼らは恵みと律法の区別ができず、神の恵みをどのように用いるのかがわかっていないと、私は思います。

ガラテヤ 5:18 でパウロは言っています。

「しかし、御霊によって導かれるなら、あなたがたは律法の下にはいません。」

パウロは、これより前に、聖霊に導かれる人はだれでも、神の子どもですと言っています。ですから、あなたは選択しなければなりません。神の子どものように生き、聖霊に導かれるのか、それとも、聖霊に背を向けて律法を守ろうとするのかです。2つを混ぜ合わせることはできません。これがあなたに言いたいことの本質です。これこそ、人々が薄暗さの中に入ってしまう場所です。彼らは恵みを半分信じ、半分は自分が守っている自分の規則を信じているのです。

私は規則を守ることが悪いことだと言っているのではありません。規則を守ることがあなたを義とするのではない、と言っているのです。お分かりですか。もう一度言います。規則を守ることが、あなたを義とするのではありません。

これを聞いているみなさんのほとんどが教会や教団に属し、そこには規則があるでしょう。何らかの団体に属していたら、その規則を守ることは普通です。もし、規則が守れないのなら、そこに属するべきではありません。しかし、規則を守ることがあなたを義としてくれるのではありません。ほとんどの宗教的団体には独自の規則があるので、実際、キリストのからだの分裂の主な原因はそこにあるのです。カトリックも、バプテスト派も、セブンスデー・アドベンチストも、ペンテコステも、その他様々すべてにそれぞれの規則があります。これらのグループのほとんどの人がその規則を守ることが義とされると考えています。そして、他の規則をも持っている人々を見て、「彼らは私たちの規則を守っていないから、本当の義人ではない。」というのです。律法主義とはどういうものかがわかるでしょうか。それはキリストのからだを分裂させます。

バプテスト派は、聖書的な規則を守ることは自由です。ペンテコステ派も同様です。カトリックも聖書的な規則です。しかし、いずれも規則を守ることによって義とされるのではないことを忘れないでください。信仰によって、義とされるのです。

問題は、もし、規則にフォーカスするなら、私たちは信仰を見落とす可能性があり、再び薄暗い中に自分がいることに気づくということです。あるいは、地図によってできると考えたあの若者のように、結局は沼地にはまってしまうのです。沼地にはまるということを経験した方もいらっしゃるでしょう。実際にその沼地から脱出して聖霊さまが必要だと気づいた人もいらっしゃるでしょう。アーメンですか？

では、ここでもう一つのショッキングなことを言います。もし、パウロが最初に言わなかったら、私はあえてそれを言いません。それは、ローマ7章にあります。ローマ書は実に素晴らしい書簡です。私はクリスチャンになる前は論理学の教授でした。私は論理的なことにとっても興味があり、論理学は素晴らしいと考えています。それはコンピュータのようなものです。コンピュータで正しい情報を送ると、正しい結果を得ることができます。しかし、もし、間違った情報を送

ると、あなたは間違った結果を得ることになります。論理学はあなたに答えを与えることはなく、ただ結論が矛盾するかどうかを知ることができるだけです。ですから、私が今までに読んだ本の中で、聖書は最も論理的な本だと言うことができます。私は、個人的に知的な面で劣っているとは思いません。なぜなら、聖書を信じているからです。それが、私の個人的な考え方です。あなたも、知的な面で劣っていると感じないでいただきたいのです。原理主義者のようにあなたを決めつける人もいるかもしれませんが。それが何であれ、原理主義者であってください。実際、そのことは、あなたに敵対する人々の感情を呼び起こすために用いられます。原理主義者だと決めつける人々は、原理主義が何であるかを定義づけていません。人々は、ちょうど他の人に罰点をつけるために使用するたくさんのことばがありますが、それを定義づけていません。原理主義者と呼ばれることを恐れしないでください。次に誰かがあなたをそのように呼ぶなら、こう言ってください。「すみませんが、原理主義者とはどういう意味ですか。」

では、ローマ7章のパウロのショッキングな言葉です。先に進むと、さらにショッキングなことがあります。ローマ 7:4 以降です。

「私の兄弟たちよ。それと同じように、あなたがたも、キリストのからだによって、律法に対しては死んでいるのです。それは、あなたがたが他の人、すなわち死者の中からよみがえった方と結ばれて、神のために実を結ぶようになるためです。」

パウロは2つのことを言っています。あなたが宗教的なユダヤ人であるなら、あなたは律法と結婚したということが一つ、もう一つは、律法から解かれたあなたが、その律法は死んだと理解しない限り、別の人と結ばれることは姦淫、すなわち靈的姦淫であるということです。しかし、イエスの十字架の死によって律法は死にました。おわかりですか。

これは、ほとんどのユダヤ人にとって、現実の問題です。彼らは、基本的にはあまり律法を行なっていないのですが、律法を守ろうとしないなら、彼らは夫に対して不誠実な者だと感じます。別の人、すなわち、よみがえられたメシヤと結ばれるために、キリストにあって律法を死につけるという啓示がなければなりません。そして、キリストを通して彼らも私たちも、実を結ぶことができるのです。お分かりですか。実^みは、一致からしか生まれません。私たちが結ばれているものが、結ぶ実を決めます。キリストにある一致で、私たちが結ばれているなら、私たちは御霊の実を結ぶでしょう。

先へ進みましょう。

「私たちが肉にあったときは、律法による数々の罪の欲情が私たちのからだの中に働いていて、死のために実を結びました。」

これは、驚くべき宣言ではないでしょうか。律法による罪の欲情です。パウロは他のことばで、律法が罪深い欲情をかき立てると言っています。そのことを受け入れることができますか。

別の聖句を挙げましょう。第一コリント 15:56 です。これは息をのむような聖句の一つです。

「死のとげは罪であり、罪の力は律法です。」

パウロは、ローマ7章で、律法には誤りはなく、良いものであると言っています。問題は私たちにあるのです。このような言い方もできるでしょう。律法は外側から働く。律法は、これをせよ、あれはするなど言います。あなたは、「よし、これをして、あれはしないぞ。」と言います。つまり、行なうときに、あなたは自分の能力に頼るのです。それこそが、問題なのです。なぜなら、正しいことを行ない、間違っていることを避ける能力を、あなたは持っていないからです。しかし、私たちの自然の肉体的な思いは、自分により頼み、神にゆだねたくないのです。

エデンの園での誘惑に戻りましょう。サタンはどのような動機を用いましたか。「あなたは神のようになるのです。」神のようになることにおいて間違っていることは一つもありません。何が問題だったのでしょうか。彼らは神により頼むのではなく、善悪の知識により頼んで、神のようになるのです。それは人間の問題の根っこ、宗教的な人々の問題の根っこです。神のようになりたいですが、神により頼みたくないのです。罪の本質は、神により頼むことを拒絶することです。それが罪の本質なのです。罪とは、あなたがある特定の罪深い行為をしたことではなく、あなたの人生から神の恵みを締め出す自己依存の態度です。そして、神がみなさんや私を取り扱わなければならない中で最も難しいことは、独善的な態度だと思います。「私は自分でできる。神は必要ない。」という態度です。

私の知る限り、これは一つの意見ですが、神から自立したかった被造物はたった2種類です。一つは、反抗してサタンに加わった墮天使で、もう一つは人類です。その他のものは一つとして神から自立するという願いはありません。鳥は自立願望がなく、魚も、星たちも、神により頼むことを楽しんでいますが、みなさんや私たちは、失敗や肉体的な性質のゆえに、この問題を受け継いでおり、神により頼むことを嫌います。「私は自分でやってきた。神は必要なかった。」と言えることを好みます。

みなさん、あなたには本当に神が必要です。あなたが神は必要ないと思うとき、あなたは一番神を必要としているのです。あなた自身のクリスチャン生活を分析するなら、あなたが出くわしたすべての問題は、神なしにしようとしたこと、神の恵みにゆだねることを拒否したことが原因であると気づくのではないのでしょうか。

妻のルースは数年前に病院で手術を待っていました。彼女はとても弱っており、聖書を読みたいと思いましたが、読めませんでした。偶然にもそこはカトリック系の病院で、70歳を過ぎていると思われるシスターが、新しい患者を見て回っており、そのシスターは妻と妻の持っていた聖書を見ましたが、妻はあまりにも弱っており、聖書を読むことができませんでした。そのやさしいシスターは、「何かしてほしいことがありますか。」と尋ねました。妻は「はい、すみませんが、聖書を読んでいただけませんか。」と答えました。「どの箇所を読みましょうか。」「ピリピ2章をお願いします。」シスターは、「まあ、その箇所は私が修道女として献身した時の聖句です。」と言いました。こうして彼女たちは出会いました。

それから、そのシスターはある出来事を分かち合いました。彼女はある修養会に参加しており、その時に修道士から語られたメッセージを妻に分かち合ってくれたのです。その内容はこのようなものです。

「尊敬されないように、安全でないように、独立的でないように、また管理されないようにありたいと祈りなさい。」

あなたは、そのように祈りますか。少し時間がかかりますよね。私はかなり長くそのことを考えました。尊敬されないように、まあ、これは私にはあまり問題ないと思います。独立的でないように。私は独立的であることが間違いである

ことに気づきました。しかし残りの 2 つは私にはかなり難しいです。私は本当に安全でないことを望むでしょうか。まあ、私の安全は主にあります。しかし、どの箇所に、安全でないようにと書かれているでしょうか。それは私には難しすぎます。私は本当に自分を管理しないでいたいと思うでしょうか。言い換えれば、私は本当に神に管理してもらいたいと願っているだろうか、です。そこが核心です。神が管理される時、それが恵みです。

そのシスターが妻を通して私に分かち合ってくださいましたことを感謝します。お分かりのように、私は人間の基本的な問題が自己管理、安全、ゆだねないことだとわかりました。罪の本質は、全知全能の愛なる神によってつくられた宇宙にいなから、その支配を受けたくないと思うことです。自分にはそんな問題がない、と誰も言うことはできません。なぜなら誰一人、常に神により頼み、神の支配に任せることに満足している人はいないからです。それこそが、本当の信仰の歩みです。恵みに歩むことです。それを数時間で達成することはできません。事実、私は 50 年以上かかっても、たどり着いていません。しかし、以前より近づいています。ですから、みなさんを励ましたいのです。

先へ進みましょう。律法は罪をかき立てます。なぜでしょうか。それは、「私はできる、自分を信じて進め。私がしなければならぬのは、これらの規則を守ることだけだ。」と言って、自己依存、独立独行の罠に陥るのです。それは私たちがだます律法の方法です。律法には悪いところは何もありません。パウロは同じ章で律法は良いもの、聖なるもの悪いところは何もないと言っています。問題は私たちにあり、肉的な性質により、私たちはみな、自立したいという願いを持っているのです。

ほとんどの方が赤ちゃんを観察したことがあると思います。私は 2 歳くらいでこの自立心が芽生えてくると気づきました。この小さくてかわいいよちよち歩きの 2 歳児に「こっちへ来てごらん。」と言います。すると、赤ちゃんは反対を向いて行ってしまいます。そんな経験がありますか。それは古い肉の性質が私たちの内に現れるからです。律法は、その問題を明るみに出す神の診断です。

あなたが医者に行き、「先生、胃が痛むのですが。」と言うと、医者はただ薬を出すだけではなく、痛みの原因を見つけようとするでしょう。いわば、薬を処方する前に診察をするのです。それは、神が私たちを取り扱う方法です。神は、私たちの問題を診断するまで、薬を勧めません。そして私たちは最悪の方法で薬が必要だと知るのでした。

ローマ 10:4 を見てみましょう。

「キリストが律法を終わらせられたので、信じる人はみな義と認められるのです。」

あなたがイエス・キリストを信じるのであれば、それは律法の終わりです。あらゆる意味での律法の終わりではなく、義のための律法の終わりです。神に義とされる手段として、キリストが律法を終わらせたのです。キリストが死なれた、それがその終わりです。キリストが死からよみがえり、律法を守ることではない、神に義とされる新しい方法を与えてくださいました。ですから、キリストは義のための律法の終わりです。キリストは神のことばの一部としてでもなく、イスラエルの歴史の一部としてでもなく、神が人々を取り扱う方法の一例として律法を終わらせたのでもありません。律法はなおも存在します。しかし、義を得る手段としてではなく、十字架の上でのキリストの死は、ついに律法に終わりをもたらしました。

ここで、ガラテヤのクリスチャンの例を少し見てみましょう。ガラテヤ人への手紙は興味深い書簡です。あなたに神学的な知識があるなら、パウロがガラテヤ人を取り扱ったその問題とは何かと私が尋ねたら、律法主義だと答えるでしょう。それは、この問題のいわゆる神学的な側面です。パウロが教会に宛てて書いた書簡のほとんどは、その人々にあるすべての良いことについての、神への情熱的な感謝で始まっています。父の妻と住む男性や主の晩餐で酔っぱらう人がいたコリント人への教会でさえ、パウロは神の恵みのゆえに、神に対する感謝を熱い表現で始めています。しかし、パウロがガラテヤ人を取り扱ったとき、神の恵みを神に感謝することなく、かんかんに怒りました。ガラテヤ人の問題は何だったのでしょうか。酒に酔うことでも、姦淫でもありません。では、何でしょう。律法主義です。パウロは、姦淫や酒に酔うこと以上に、彼らの幸福に対するもっと深刻なものを見なしました。

私は、神が姦淫や酒に酔うことを大目に見ると言っているのではなく、律法主義は非常に複雑なので、それらは律法主義よりも取り扱うのが簡単な問題であると言っているのです。律法主義は見た目にはよさそうで、正しいと考えますが、そこから解放されることはとても難しいのです。しかし、パウロはガラテヤ 1:6 でこう言っています。

「私は、キリストの恵みをもってあなたがたを召してくださったその方を、あなたがたがそんなにも急に見捨てて、ほかの福音に移って行くのに驚いています。」

このように、パウロは良いことを一つも言いませんでした。「こんなにすぐにあなたがたが移っていくのに驚いている。」とだけ言いました。何に移って行ったのでしょうか。規則を守ることによって義とされることを信じるという律法主義に移って行くと言っています。

ガラテヤ 3 章 1 節で、パウロはこのテーマに戻っています。

「ああ愚かなガラテヤ人。…だれがあなたがたを迷わせたのですか。」

私は数年前にこの箇所を読んでいるとき、ふと、ペンテコステ派やカルスマ派のクリスチャンが迷わされるのは、これらがカルスマ的なことに、疑問がないからだと気づきました。そのことは、私が牧会していた教会で起こった状況の説明につながり、私の思いの中の大きな問題の解決になりました。詳しくは語りませんが、私の教会全体が前任の牧師の奥さんに惑わされたからです。その奥さんは夫と離婚し、役員の一人与再婚し、依然として人々を霊的に支配していました。ですから、みなさんにお勧めさせて下さい。もし、あなたが理解できない何らかの問題に向き合っているなら、そのことが問題であるかもしれないのです。人々は迷わされています。パウロは非常に明確な意味を用いています。事実、迷わすとは、ギリシャ語では、「目で殴る」です。彼らは目で殴られ、彼らを惑わす目の支配下におかれているのです。

カルスマ派になった、ギリシャ正統派の祭司が数年前に私のところにやって来ました。彼は私に祈ってほしいと言い、「私は惑わされてきた。誰かが私に邪悪なまなざしをかけているんです。」彼は非常にまじめな人で、聖書にも精通しています。このことに時間を費やしたくありませんが、これは一つの可能性であるという事実を分かち合いたいのです。事実、ケースによるので可能性です。

「ああ愚かなガラテヤ人。十字架につけられたイエス・キリストが、あなたがたの目の前に、あんなにはっきり示されたのに、だれがあなたがたを迷わせたのですか。」

パウロは、「私は、あなたがたに十字架のメッセージを伝えました、イエスが私たちの罪のために十字架につけられたとはっきり伝えました。どうしてそれから離れて他の基準の義に行くことができるのですか。」と言っているのです。

「ただこれだけをあなたがたから聞いておきたい。あなたがたが御霊を受けたのは、律法を行ったからですか。それとも信仰をもって聞いたからですか。」

みなさんは、規則を守ったから、聖霊のバプテスマを受けたのでしょうか。それとも、信仰をもってメッセージを聞き、受け取ったから聖霊のバプテスマを受けたのでしょうか。

質問しましょう。これをお聞きの方の中で、規則を守った結果、聖霊のバプテスマを受けた人はいますか。誰もいません。そのことを忘れないでください。私たちは規則を守ることで救われたのではなく、規則を守ることで聖霊のバプテスマを受けたのでもありません。パウロが言うように、私たちは信仰をもって聞いたので、救いと聖霊を受けたのです。信仰をもってメッセージを聞き、それを信じ受け入れたのです。それからパウロは言っています。

「あなたがたはどこまで道理がわからないのですか。御霊で始まったあなたがたが、いま肉によって完成されるというのですか。」

そのようになることは、愚かですよ。あなたが義人の歩み始めるために聖霊を必要としたなら、どうして聖霊にゆだねることをやめることができるのでしょうか。どうしてあなた自身のわずかな規則に頼ることができるのでしょうか。しかし、これは現実です。10節を見てみましょう。

「というのは、律法の行いによる人々はすべて、のろいのもとにあるからです。こう書いてあります。『律法の書に書いてある、すべてのことを堅く守って実行しなければ、だれでもみな、のろわれる。』」

あなたが律法を守ることで正しい者なろうとしているなら、常にすべての律法を守らなければなりません。そして律法を守ろうとするけれど、すべての律法を常に守らないなら、「のろいはこの律法のことばを昼も夜も守らない者はのろわれる」言われているように、のろいの下に置かれるのです。

ペンテコステ派やカルスマ派の信者がのろいのもとに置かれる可能性はあるのでしょうか。かなり可能性はあると思います。実際、私自身の経験でそうわかるのです。詳しくは語りませんが、キリストのからだのムーブメントの一員であった私は、誰も予想しなかった働きにおいて、主権者なる聖霊に導かれました。神は私のよく知る他の3人の説教者たちと共にいてくださいました。私たちは御霊によって始まりましたが、1年もたたないうちに肉に終わってしまいました。ですから、私はそれが現実的だとわかるのです。私とその経験者です。聖書を読み、それを信じ、私が置かれていた状況を理解したので、神は恵みにより、それから脱出させてくれたと思います。しかし、みなさん、それは遠い昔のことではなく、今日も起こるのです。御霊で始まった人々が自分たちの肉的な性質により、完全とされようとして、のろ

いのもとに来るのです。

私自身のことを考えると、多くの教会がのろいのもとにあると言えるかもしれません。

もう一つ、エレミヤ 17:5 を見てみましょう。

「主はこう仰せられる。『人間に信頼し、肉を自分の腕とし、心が主から離れる者はのろわれよ。』」

心が主から離れた人は、主との交わりがあったことは明らかです。しかし、人間に信頼し始めるようになると、その人の心は主からはなれてしまったのです。

私は、キリスト教会と公言している多くの教会にそのようなことが起こっていると思います。特定の教派やムーブメントを上げることはしませんが、世界の教会のかなり多くの教派やムーブメントが神の御霊による素晴らしい働きを神の恵みにより生まれました。彼らはそこから離れるべきではありませんでした。しかし、今日そのうちのいくつかが神の恵みにおいて継続しているのでしょうか。私はわずかだと思います。彼らは自分で、エレミヤ 17:5 で言われているのろいのもとに来たのです。

「人間に信頼し、肉を自分の腕とし、心が主から離れる者はのろわれよ。」

このことを私の経験からお話ししましょう。妻と私はエルサレムの家を売ることを決め、不動産業者に行くと、彼らはこう言いました。「これは素晴らしい家ですから、すぐに高く売れると思います。」14 か月間まったく売れませんでした。私たちはその理由がわかりませんでした。しかし、私がエルサレムで集っていた教会の礼拝で、その教区の牧師がこう言いました。「悪霊からの解放を必要としている人のために祈ります。」すべての教区牧師がこのような言い方はしませんが、その人はそう言ったのです。ですから、私は彼の手伝いをしようと思いました。私はその祈りに参加し、解放を必要としていた人は、偶然にものろいのもとにあったアフリカからの宣教師でした。説明は省きますが、そののろいは、アフリカ黒人の主教によって宣言されたものでした。彼は瀕死の状態でした。私たちは祈り、その人はいくつもの悪霊から解放され、彼の全生活の態度を取り扱い始めました。私は彼にこう言いました。「私には、あなたが自分自身をあまりにも信頼しすぎていると感じる。あなたは神の恵みにより頼んでいない。実を言うと、私にもその問題があったのです。」私は、このようなことを言うつもりはなかったのですが、口から出てきたのです。「私は、自分にできることにより頼み、家売ることに於いて、その問題を持っているのです。」ざつぱらんな性格の妻はその人たちの前で私にこう言いました。「じゃあ、あなたはのろいのもとにあるのですね。」私は、「その通りだ。」と答えました。私はそれを告白し、悔い改め、のろいから解放されました。私たちはその集会から新しいアパートに帰ると、そのアパートの1階で不動産業者と出会いました。彼は、「あなたの家を買いたいと言う何人かに家を見せたいのですが。」そして2週間以内にその家は売れたのです。お分かりになりますか。私がのろいから解放されたその瞬間に神は私たちのために動くことができたのです。

先に進みましょう。この話題について、いくつかの一般的見解を言いたいと思います。そして肯定的な面を紹介しなければなりません。すでに言いましたが、繰り返します。律法は私たち自身の能力に任せることがないように働きます。恵みは超自然的な能力を供給することにおいて働きます。私たちは、恵みによってのみ、それができるのです。

レビ記 11:44 と第一ペテロ 1:6 に「聖でありなさい。」という命令があります。これは神からの命令です。しかし、レビ記11章を読むと、食べて良い物と食べてはいけない物についての細かい規定の最後にその命令が来ています。あなたが聖であろうとするなら、これらすべての規定を守りなさいということです。しかし、第一ペテロ 1:16 には、この規定は全く触れられていません。伝えたいメッセージは「聖であること」です。それはイエスからのメッセージで、「わたしの聖さがあなたがたのうちに生きるように。」まったく違っています。もはや私たちの努力によるのではなく、自分でできないことを、神とイエスの恵みにより頼むのです。あなたが選ぶのです。

さて、その肯定的な側面を少し考えてみましょう。ローマ 8:3-4 を開いてみましょう。

「肉によって無力になったため、律法にはできなくなっていることを……」

お気づきのように、律法には何の誤りもありません。私たちの無力さのゆえです。

「肉によって無力になったため、律法にはできなくなっていることを、神はしてくださいました。神はご自分の御子を、罪のために、罪深い肉と同じような形でお遣わしになり、肉において罪を処罰されたのです。」

これのどこが肯定的なのでしょう。

「それは、肉に従って歩まず、御霊に従って歩む私たちの中に、律法の要求が全うされるためなのです。」

これは難問です。義が律法に要求することは何でしょうか。そのようなことを考えたことがありますか。短い単語でお答えしましょう。愛です。愛は、義が律法に要求するもので、いくつかの聖句からざっと示したいと思います。

マタイ22章でイエスは律法学者に答えています。律法の思いはこのようなものです。35節です。

「そして、彼らのうちのひとりの律法の専門家が、イエスをためそうとして、尋ねた。『先生。律法の中で、たいせつな戒めはどれですか。』」

具体的な質問にイエスは即座に、具体的に答えておられます。

「そこで、イエスは彼に言われた。『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』これがたいせつな第一の戒めです。『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ』という第二の戒めも、それと同じようにたいせつです。」

鍵となる言葉は何ですか。愛です。神への愛、隣人への愛です。

そしてイエスは、「律法全体と預言者とが、この二つの戒めにかかっているのです。」と言われました。

さて、もし私が暑いと感じたなら、上着を脱いでフックに引っ掛けます。そのフックは、私が服を掛ける前になけれ

ばなりませんね。これらの命令は、律法全体と預言書が掛かっているフックです。言い換えると、あなたがすべての律法と預言書を読むとき、それは神を愛すること、隣人を愛することについて書いてあるということです。それこそが、義が律法に求めていることなのです。

ローマ 13:8 以降でパウロは言っています、

「だれに対しても、何の借りもあってはいけません。ただし、互いに愛し合うことについては別です。他の人を愛する者は、律法を完全に守っているのです。」

私には一つのことを除いて何の借りもありません。それは、私のクリスチャンの友人たちを愛することと、私の友人たちを愛することで、そのことについては私は常に借りがあります。その借りから抜け出すことはできません。

パウロは続けています。

『姦淫するな、殺すな、盗むな、むさぼるな』という戒め、またほかにどんな戒めがあっても、それらは、『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ』ということばの中に要約されているからです。愛は隣人に対して害を与えません。それゆえ、愛は律法を全うします。」

とても明確ですね。

そして、ガラテヤ 5:14 です。ローマ人とガラテヤ人がともに寄り添っているような素晴らしい箇所です。

「律法の全体は、…『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ』という一語をもって全うされるのです。』」

そして少し戻ってガラテヤ 5:6 です。

「キリスト・イエスにあっては、割礼を受ける受けないは大事なことではなく、愛によって働く信仰だけが大事なのです。」

信仰はどのように働きますか。愛によってです。

では、ヤコブの手紙を見てみましょう。

「行ないのない信仰は死んでいるのです。」

信仰は愛によって働くので、このような方程式が浮かびます。愛のない信仰は死んでいる。これは衝撃的な宣言ですが、真実なのです。あなたは必要とするあらゆる信仰を持つことができますが、あなたの人生に愛がなければ、死んだ信仰です。

I テモテ 1:5、6 を読んでみましょう。

「この命令は、きよい心と正しい良心と偽りのない信仰とから出て来る愛を、目標としています。ある人たちはこの目当てを見失い、わき道にそれて無益な議論に走り…」

英語のある訳では、「私たちの教えのゴールは愛です。」となっています。私はそれを読むとき、愛が私の教えのゴールとなっているだろうかと自分に問います。私は本当に愛なる人々を生み出すことを目標としているだろうか。私は自分の説教を聞いた何人かについて考え、本来教師で、教師は知識を与えるものなので、私にはよくわかりませんでした。知識は何をするのでしょうか。ふんぞり返り、人々を高慢にさせます。私は高慢な人を作り出さない教えをするために、あらゆる手を尽くして挑戦することを学びました。しかし、私が教えてきた人たちの幾人かを振り返ってみると、「私はあまり良い仕事をしなかった。」と言わなければなりません。私たちの教えのゴールは愛です。

そして、パウロは、目当てを見失い、わき道にそれて無益な議論に走ると言っています。

私たちが知っている教会についてちょっとよく考えてみましょう。教会でどれくらい無益な議論がなされているでしょうか。どれくらいのメッセージや教え、活動が愛を生んでいるでしょうか。すべて無駄な努力です。まったく効果がありません。みなさん、あなたが何らかの奉仕に携わっているなら、あなたの動機を分析してください。愛を生み出すことを目指していますか。あなたが愛を生み出すことを目指しているとしたら、それを実際に生み出していますか。もし、あなたが愛を生み出すことを目指していないなら、あなたが語ることはすべて単に中身の無い言葉です。それは広範囲な声明ですよ。

ご存知のように、律法は私たちに恐れによって動機付けをしますが、イエスは愛によって私たちに動機づけをします。イエスは、「あなたがたが私を愛するなら、私の戒めを守るはずです。」と言われました。恐れは結果を生みません。多くの宗教が恐れによって人々に動機づけをし、もっとも恐ろしい結果をもたらします。キリスト教の形式を取っているいくつかのものも含めて。

そして、もうメッセージも終わりますが、これを言わせてください。愛の従順は進歩的です。あなたは愛において完全ではありません。よいでしょう。私もそうです。しかし、それは私が義とされていないという意味ではありません。なぜなら、私たちがゴールに達するまで、私たちの信仰は義とされるのです。それを受け入れますか。あなたが信じ続けるなら、あなたの信仰は義とされます。これは最後の晩餐でペテロへのイエスのことばによって見事に例示されています。イエスは、「ペテロ、あなたはわたしを三度知らないと言います。」ペテロは言いました。「私は決して知らないなどとは申しません。」そしてイエスは言われました。「わたしは、あなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈りました。」本当に重要なことは何でしょうか。私たちの信仰がなくならないことです。私たちはたかさんの間違いを犯してしまうでしょうし、罪を犯してしまうことがあるでしょう。私たちはまだたどり着いていませんし、完全でもありません。しかし、私たちが信じ続けるなら、私たちの信仰は私たちがたどり着くまで義とされるのです。

最後に、ヤコブの手紙で締めくくりたいと思います。ヤコブ 1:25 です。

「ところが、完全な律法、すなわち自由の律法を一心に見つめて離れない人は、すぐに忘れる聞き手にはならないで、事を実行する人になります。こういう人は、その行いによって祝福されます。」

完全な律法、自由な律法は何でしょうか。そう愛です。あなたが本当に愛するなら、あなたは完全に自由な人となります。それは、あなたがいつもしたいことができるからです。あなたはいつも人々を愛することができるのです。人々があなたをむげに扱っても、あなたを迫害しても、たとえ殺そうとしても、その人たちはあなたがその人たちを愛することをやめさせることはできません。愛を動機とする人は、世界の中で完全に自由な人だけです。アーメンですか。アーメン！